真剣で恋する五秒前！

西野二伸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で恋する五秒前！

【Ｎコード】
Ｎ８３６３Ｙ

【作者名】
西野二伸

【あらすじ】
かつて神童と呼ばれた男『城下典二』は風間ファミリーに在籍していた。彼はあの武神と呼ばれる川神百代に、数年前に一度勝利した事がある。そんな彼は中学二年時に父親の仕事の都合で海外へ転校することが決まった。事実上の風間ファミリー脱退だ。時は流れて２００９年のゴールデンウィーク明け、一人の転校生がやってきた。その人物の名は――

プロローグ1　『再び会えるその日まで』

昔、風間ファミリーには“五人目の男”がいた。

個性的な風間ファミリーの中で、あらゆる点で偉才を魅せる彼を、皆口々に『神童』と呼んだ。

若干十歳にして英語をマスター。韓国語、ドイツ語を通常生活で問題無いほどのレベル。更に数学では数学検定一級を取る。当時メディアから注目を浴びたが、全ての取材を断り、一部関係者に『神童』と呼ばれる。

武術でも、足技を主流とするサバットで有名な流派に弟子入りして、技術を全て盗んできた。

ただそんな彼でも『完璧』な訳では無い。極端なだけだ。

彼は興味を持ったモノを、学習するという点で天才的な学習能力を発揮する。

なので、韓国語、ドイツ語をマスターできないのも、学習する過程で飽きたのだ。いや、違うモノに興味を惹かれた言っても過言ではない。数学が優秀でも、漢字は苦手である。一度漢字検定を受けたが惨敗。

サバットの技術が完璧でも、最強ではない。普段から体造りを活発を行っていないので、体力的には一般男子高校生並。戦闘となっても、戦いを長引かせれば、敗北は免れない。

そんな彼は、風間ファミリーでＮｏ．２的存在で、暴走する風間を上手く落ち着かせたり、ニヒルな大和の話に付き合ったり、家族がいない一子の兄のような存在であり、クラスから虐められていた京の心の傷を癒したり、百代の戦闘欲求解消の相手にさせられた。

それが彼、『城下典二（しろした　てんじ）』。

典二は十三歳の夏、東京の空港で風間ファミリーのメンバー全員に囲まれていた。

今日で典二は日本を離れ、ヨーロッパにて新たな生活を始めることが決まっていた。事実上、今日を以（も）って風間ファミリーから脱退する。

「おいおい。皆そんな悲しそうな顔するなよ。俺まで泣きそうになっちまうよ」

なんて気楽的な声を投げかけるが、殆どのメンバーは下を、空港の地面を見つめている。

「あっちに言ったって、電話やパソコンで連絡取れるだろ？　今はネットが世界中に繋がっているんだから」

典二はわかっている。風間ファミリーは自分と連絡を取れないので悲しんでいるのでは無い。典二の傍に居られないのが、辛いのだ。

典二を心の拠り所としている京が、特に。

「ゴメンな、京。傍に居られなくて。でも我慢してくれ。今はお前が一人じゃない。風間ファミリーの皆がいるだろ？」

京は地面を見ていた視線を、少し上に修正する。ギリギリ典二の顔が見えない境界線だ。

「うん。私は大丈夫。でも、それとこれとは関係ないよ。典二に会えないのが、寂しい――」

しょうがないな。そんな感じで典二は両手を広げた。

「ほれ。最後の別れだ。別れの挨拶代わりに抱擁、てのはどうだ？」

京は迷わずに飛び込んだ。愛しい彼の、これからずっと会えない彼の胸の中に。

それに吊られて他のメンバーも典二に飛びかかった。典二は押しかかるメンバーの体重に耐えながら、泣きながら笑った。

これが、偉才の神童城下典二が生涯初めて流した涙だった。

プロローグ１　『再び会えるその日まで』（後書き）

初作品…ども…
俺みたいな高１でエロゲやってる腐れ野郎、他に、いますかっていねーか、はは

今日のクラスの会話
あの流行りの曲かっこいい　とか　あの服ほしい　とか
ま、それが普通ですわな

かたや俺は電子の砂漠で幼女の幻覚を見て、呟くんすわ
ｉｔ'ａ　ｍｏｅ－ａｎｉｍｅ　ｗｏｌｒｄ．ブヒ豚？それ、誉め言葉ね。

好きなエロゲ　真剣で私に恋しなさい！
初めてプレイした作品　つよきす（アニメ化はＮＯ）

なんつってる間に初投稿っすよ（笑）　あ～あ、感想が欲しいね、これ

プロローグ2　『思い出した、あの記憶』

父の仕事の都合で日本を離れていた典二の元に、久しぶりの日本人の来訪客が訪れていた。

前に風間が気分気のままに旅行していたついでに典二の元へ来訪したので一年振りだ。

日本人の名は『九鬼紋白（くきもんしろ）』。あの九鬼財閥の末妹であり、九鬼家政界対策部門のトップで在らせられる。

その紋白がわざわざ典二に会いに来たのは他でも無い、九鬼の従者部隊に空きが出来たのだ。その空きを埋めるべく、世界各国をスカウトの旅に出ている。

そんな彼女は日本にいる武神川神百代に数年前、唯一勝ったと言う典二の元に足を運んできた。

しかし紋白は典二に会うなり残念そうな顔をした。

彼女が言うには、典二には輝きが無いと。

数々の武道家を見て来た紋白は、典二の目が武道家とは違う一般人並の瞳をしていると。輝きの何もかもない、堕落している人間の目だ。

だがまあ当り前であろう。

典二には今の所興味を持つモノが一つも無い。

楽しそうな事を全てこのドイツでやり尽くして、暇を持て余らしていた。

一通りの球技やスポーツは勿論、勉強も物理や化学、そしてギターや音楽関係にも手を出してインディーズながらも固定ファンが付くほど上達。だが全てにおいて、途中で飽きたのだ。スポーツは昔百代と戦った時ほどの緊張感や勝利した時の快感を超えられず、勉学も大学院レベルまで極めたが飽きて、音楽は歌いたい曲を歌ってスッキリしたと。

今は典二の言う充電期間中なので、毎日毎日暇そうにネットで面白そうなものを探したり、学校の部活動の助っ人として体を動かしているだけだ。

そんな典二に会っても、彼の持つ魅力に気付く者などいない。

「……一応これを渡しておこう」

紋白は護衛役であるクラウディオに指示をして、一枚の紙を典二に渡した。

その紙には『九鬼家従者部隊入隊案内』と書かれた一枚のポスターであった。今回従者部隊の戦闘に特化した者の空きが出来たので、世界各国の有名な道場やジムにこれを配っていると。

「従者に成れると何か特典でもあるんですか？」

「うむ。賞金か、もしくはその者の能力に見合った優遇をしてやろう」

典二は考えた。思考した。妄想した。考察した。瞑想した。思慮した。思索した。黙考した。思い巡らせた。

そして、昔成し遂げたあの快感を思い出した。

父の海外出張で三度で終わってしまった、百代との決戦を。

あの時は楽しかった。敗北させられた百代に、厳しい修行を重ねて勝利したと思ったら、たった二週間で自分よりも強くなった百代を相手にして、二回目の敗北。勝って負けて勝利して敗北するライバル関係が永遠に続くと思っていた、あの日を。

忘れてしまっていた。この数年間くだらないことに興味を持ってやっていたからだ。

典二は思った。

そっか。アイツと出会ったから、他のモノに、戦闘以外に強い興味を示さなかったのか。

だから俺は何をやっても中途半端なのか。

俺は、百代と完全な決着をして終わらせないと、他のモノに熱中できないな。

いつもの典二に戻った。

否、

本来あるはずべき姿の『城下典二』になった。

彼は紋白達が出て行ったあと、支度を始めた。

九鬼従者部隊に入隊する準備だ。鈍(なま)りに鈍(なま)って鈍(にぶ)くなった身体を鍛え直すためだ。

プロローグ3　『大和の前触れ』

5月7日の朝。

直江大和は不思議な感覚に襲われていた。

懐かしく、そしてとても楽しい前触れだ。

今日は何だか良い事が起きそう。ゴールデンウィークが終わり、これから退屈な授業が始まると思うと、気分が下がるはずなのだが、とてもそんな感じがしない。まるで遠足の前の日のワクワク感だ。

「やあ大和。今日も晴れて良い天気だよ」

「……おはようクッキー。毎度ありがとう」

今日もクッキーと言う九鬼家が造り出した万能ロボに叩き起こされて、寮の食堂へ向かう。

寮と言っても、そこまで大きくなく、一階に男子、二階に女子の各階三人の合計六人で共同生活をしている。

食堂には五人の男女が朝食を摘まんでいる。……いや、一人足りない。大和の所属する風間ファミリーの一人、風間翔一がいない。状況だけで判断するならば、クッキーがまだ起こしていないか、また旅にでも向かったのであろう。

一人の女性が炊飯器の前で皆のおかわりの対応している。

女性の名は島津麗子。名前の麗という字が全く当てはまらない太ったおばちゃんだ。韓流ブームに数年越しで乗り続けているおばちゃんの中のおばちゃんだ。

「おう、大和ちゃんおはよう！」

「おはようございます。相変わらず名前通りに麗しいですね」

心にも無いお世辞で麗子ご機嫌を伺う。

「よしいい子だ。朝ご飯にタマゴを追加しといてあげる」

現金なもので、大和は朝食を多くして貰うためにお世辞を毎朝繰り返し使う。

白米を盛る麗子を余所（よそ）に、大和は自分の席へ座った。大和の隣では不機嫌そうに鮭の骨を取り除いている男性が一人。

源忠勝（みなもだかつ）だ。

身長は１７８ｃｍと大きめで、身体も程よく鍛えているイケメン学生。川神学園のイケメン四天王、エレガンテ・クアットロの一人として数えられている。

「ゲンさん、キャップどこ行ったか知らない？」

「あん？　知らねーよ。あのクッキーっつーロボットが知ってんじゃねえのか」

「なら京、お前は？」

「知らない。ここにはまだ来てないよ」

椎名京。

風間ファミリーを心から大切にして、今はドイツに住む典二を思う一途な女の子。今でも諦められずに、ドイツに留学しようと頑張ってドイツ語を勉強をしている健気な少女。

「わ、私も、その、今日は風間さんを見てません」

このキョドキョドした黒髪ロングの発育の良い女性は黛由紀江。通称まゆっちだ。彼女は先月風間ファミリーに入った、所謂(いわゆる)新人。

「ん？　私も知らんぞ。このお新香は凄く美味いな」

この話半分聞いてない人物はクリスティアーネ・フリードリヒ。一言で表すと、日本大好きなドイツ人の純粋なバカ。純粋であるために、大和に騙されて偽日本知識を教えられる時が度々ある。

「チッ……。早朝に寮を飛び出しってったよ。どっか旅にでも行ったんだろ」

なんてツンデレ風味に大和に教えてくれる忠勝。実は忠勝、この物語の最高最強のツンデレキャラだ。

大和は麗子から出された白米を受け取って溜息を吐いた。

またか。あの男は授業日数の事を考えているのか？　そんな不安が大和の中で渦巻く。

学園に向かう準備を終えた大和が寮を出ると、そこには奇妙な髪形でキメ顔を決めたガタイの良い男性がいた。

「おはよう岳人」

「よう大和。どうだ、今日の俺様は。何か気付かないか？」

見た感じ、似合わないツンツン頭の、某ラノベ主人公の『お前の幻想ぶっ潰す』が口癖であるあのキャラにソックリだ。

「また何の雑誌見たんだよ。似合わねえよ、そんな髪型」

「そうか？　俺様的には、結構似合ってると思うんだが」

「多分、モロが見たら爆笑するぜ？」

そのキャラ知っているから。と心の中で囁く大和。

少しして女性組も全員出てくると、岳人はある異変に気付いた。

「あれ？　キャップ遅くねーか？」

岳人は何処から取り出したのかクルミをコリコリ握り始める。さながら映画のラスボスみたいなシーンだ。右腕だけ。

「ああ。キャップならまた旅に出たよ。昨日の今日でまた旅に出るなんて」

昨日、というかゴールデンウィークの風間ファミリー総出で箱根温泉旅行の次の日に旅。本当に予測不可能な風間である。

多摩川でもう一人のメンバー、師岡卓也と合流した。

彼は痩せ型で身長が若干低く、身体を動かすよりゲームや漫画を趣味にしている、風間ファミリーの少ない常識人の一人。

「やー。……あれ、キャップはまたどこへともなく？」

「消えた。ま、気にしないで行こう」

大和が簡潔に答えると、師岡は週刊ジャソプを読み始める。

「お、トラブルンじゃん。俺にも見せろよ」

「ちょ、ガクトなにその髪型！」

「お？　なんだモロはこの魅力を理解できるのか？」

「いやいやいや！！　全然似合わないよ！！　なにその『お前の幻想ぶっ潰す』みたいな髪型は！！」

見事な突っ込みを入れる師岡だが、結局岳人は仲間の言う事を何も信じなかった。この髪型が決まっていると信じ込んでいる。

多摩川の手前へ差し掛かると、人だかりが見えた。

どうやら今日も、若干１８歳にして武神と崇（あが）められる川神百代への

挑戦者が現れたのであろう。

今回も簡単に手で蟻を払い除けるように簡単素早く挑戦者を倒すと、百代は電話で川神院に連絡して、傷付いた挑戦者の手当てを要求する。

それを終えると百代は風間ファミリーに合流した。

「大和、今回の挑戦者も弱くて欲求不満だ。だからお前で楽しませろ」

「止めてくれ姉さん！　何でいつも俺で弄ぶんだよ！！」

「それはお前が私の弟分だからに決まっているだろう。諦めて私の遊び相手になれ」

大和はこの状況から脱出するため、周りを見渡すと、一人の可愛い女生徒に目を付けた。

「あ、姉さん！　あそこに可愛い少女が！！」

「なに！」と目を輝かせて大和の指先を見ると、一年生と思われる川神学園の生徒を発見。

百代は大和を放り投げ、少女へ文字通り猪突猛進。

「みんなーーーっ、おはようーーーっ！！」

百代と入れ違いに、百代の妹である川神一子がタイヤを引きずりながらこちらへ駆けて来た。

元気一杯の笑顔に貧相な体系、そして腰まで伸びた髪を一纏(ひとまと)めにしたポニーテールが特徴的だ。

これで大体のメンバーが揃った。大和たちは皆思い思いに雑談をしながら学園に向かった。

学園中ではある噂が広まっていた。

それは２－Ｓに転校生がやってくるというモノだ。

大和が聞いた情報によれば、今日職員室で２－Ｓの担任である宇佐美巨人と高身長で痩せマッチョのイケメンがいたと、知り合いの学園女子からメールを受けた。

その情報は瞬く間に２－Ｆに広がり、お祭り騒ぎ状態となっている。

ＨＲ始まる数分前、朝寮に居なかったはずの風間が登校した。

何やら険しい表情の風間。取り敢えず風間ファミリーが風間の元へ集まった。

「おいキャップ。お前今までどこ行ってたんだよ」

「そうよ。また旅にでも出たかと思ったじゃない」

「ちょっとした用事だ。お願いだから一人にしてくれ。考えたい事があるんだ」

皆が心配しているというのにこの冷たい態度。どうやら他のメンバーの知らないところで何かがあったらしい。

いつもの風間ではないことを察し、一人一人離れて行った。

しかし大和だけは残って少し食い下がった。

「どうしたんだよキャップ。朝いなかったことと何か関係あるのか？」

「頼む大和、一人にしてくれ」

どうやらこれは本当に悩んでいるらしい。流石にこれ以上は聞き出せないと思った大和は、自分の席に戻ろうとした時、

「――Sクラスに行け。そしたら俺が何を悩んでいるのか、大方見当が付く」

そう風間は言い残し、大和は頷く事しかできなかった。

プロローグ3　『大和の前触れ』（後書き）

西野二伸です。どうぞお見知りおきを。
えーこちらとしましては特に何もありません。
もし誤字脱字がございましたら、連絡をくださると嬉しいです。
感想なんかくれちゃいますと、発狂しちゃいます。
ではまた後程（のちほど）

主人公プロフィール（前書き）

ネタバレ含む場合があるのでご注意ください

主人公プロフィール

城下典二　―シロシタテンジ―

年齢　１７歳

誕生日　４月２８日

身長　１８３ｃｍ

血液型　ＡＢ型

渾名（あだな）　ジョーゲ　典二

家族構成　父　母　妹

職業　学生　九鬼家従者部隊序列６６６位

武術　サバットを中心とした足技全般に、薙刀、斧、二刀流をマスター

好きなもの　興味を持ったモノ　仲間　妹　甘い食べ物

嫌いなもの　興味ないモノ　妹と仲間を傷つける奴　干しぶどう　梅干し

趣味　興味探し　釣り（キャッチアンドリリースを心得る）

特技　数学　物理　化学　格闘技　ギター等

尊敬する人　無し

大和たちと同学年で元風間ファミリーメンバー。男のメンバーで見れば、最後に入った五人目。
家系は、ただの一般人で、親戚の中に武道家は一人もいない。
父の親会社がヨーロッパに子会社を立ち上げて、父のヨーロッパ転勤が決まった。
当時中学生だった典二は、働きながら学校を通う発想は無く、ヨーロッパに転校。

面倒臭がり、では無く単に興味無いものはやらない主義。

年上には敬語を使い、相手の意見を尊重するので年上の人に好かれる。従者部隊のほとんどが彼を気に入っている。
だが、中には彼の本心が見えなく、気味悪いと言う人もいる。

実は妹を凄く溺愛している。
彼氏が出来たと聞けば、その彼氏によっては、最悪殺しても良いと考える。
妹と結婚したいと本気で考えることがしばしばある。ハッキリ言って病気。

主人公プロフィール（後書き）

えー主人公プロフィールは更新するにつれて増えていく予定です。
実は主人公の名前には、とある漫画の名前が隠されています。
出来ましたら、皆様考えてみてください

第一話　『転校生の正体』

一時限目の授業終了を告げるチャイムと同時に、大和はＦクラスを飛び出した。

Ｓクラスへ向かう。

風間言っていたことが気になって仕方が無い大和は、一時限目の授業中ずっと考えていた。やはり風間の様子がおかしいのは、噂のＳクラス転校生と云う訳だ。

大和の手元には一枚の写メが映し出されたケータイを握りしめていた。

その写メには、三年前ヨーロッパへ旅立ったままの、あの少年に似た風貌の男子の姿が映し出されていた。

Ｓクラス前には既に人だかりが出来ていた。きっと転校生に会いに来た野次馬連中だろう。

その人だかりの多くは女性で、黄色い声をＳクラスの転校生に送っている。

あまりの人数の多さに少し戸惑った大和であったが、アイツの姿を確認せねばと多人数の女子生徒の中に飛び込む。

一応変な所を触らないように、両手を揚げながらＳクラスへと向かっていった。

人垣を乗り越え、Ｓクラス教室前へ辿り着いた大和であったが、そこでは一人の男子生徒が教室に誰も入れまいと盾になっている。

「お前は、直江大和か」

「ちょっと中に通してくれ。転校生に会いたいんだ」

「駄目だ駄目だ。いつもならまだしも、今日はこんなに入りたがっている生徒がいるんだ。お前を入れたらこいつらも入っちまうだろ」

どんな事を言っても男子生徒は退こうとしない。

大和はチラッと教室の中を除くと、大和のライバルである葵冬馬が転校生と思わしき男子生徒と談笑していた。

「頼む！　入れてくれ！　あいつに、――――典二に会いたいんだ！！」

大和の声が聞こえたのか、冬馬と談笑していた生徒は大和の方へ振り向いた。

間違いない。

あの転校生は、城下典二だ。

「よう大和。久しぶりだな。大体三年振りか？」

「典二！」

「おいおい。そんな大きな声で俺を呼ぶなよ。おい！　そこの名も

無き男子生徒。大和を入れてやってくれ。そいつ友達なんだわ」
チッと軽い舌打ちをして、男子生徒は大和をSクラスの中に入れた。
「典二、お前いつの間に日本に戻って来たんだ？」
「ん～昨日の夜かな。長い旅だったぜ。色々と」
ハハハと笑いながら典二は大和の肩をバンバンと叩く。肩を叩かれる力が痛いのか、大和は苦笑いをする。
「ちょっと典二に聞きたい事がある」
「おう。何でも訊け」
「なんで帰って来る事を、俺達に伝えなかった？」
「あ～やっぱりそこが気になる？」
大和の真剣な顔つきに、少したじろぐ典二。ポリポリと頬を掻きながら話し始める。
「別に今回ここに来たのは、お前達、風間ファミリーに戻りに来たわけじゃない。俺の自分勝手な欲望の為にここに居るんだ」
「欲望？」
「ああ。欲望だよ。今は言えないが、その欲望の為にここへ来たんだ。そしてその欲望を達成する為には、風間ファミリーには戻らないことが得策だと考えた」

「ちょっと待てよ。風間ファミリーに戻らないって、どういう意味だよ？」

大和は珍しく慌てた口調へとなった。普段は考えて常に最良の答えを出す大和がここまで慌てる姿は珍しい。

それほどまでに典二が言ったことに怒りを感じているのだ。

「京が、他の皆がどれだけお前に会いたかったか、お前だって分かるはずだろ？」

「そりゃあ知ってるけど、ちょっと俺にも用事があるんだよ」

「だから、具体的に説明しろ！　何があったんだよ、ヨーロッパで！」

はあっ、とため息を吐いて、後方の席に特別待遇の席に座る九鬼英雄に顔を向ける。

「すいません！　俺の正体言っても良いですか？　このままでは大和が納得してくれません」

メイドの忍足あずみに体中をマッサージされている英雄は威風堂々と答える。

「構わん。あれが正式に発表されるのはまだ先だからな。貴様の正体ぐらいバラしても良かろう」

「流石です英雄様！　心が広大なる海のように広いです☆」

英雄の笑い声をＢＧＭに大和は、英雄と不自然な会話をする典二に目を丸くする。

「大和。実は俺、九鬼従者部隊に就職したんだ」

「……はあっ！？」

「だから色々と忙しいんだ。戻るっても、金曜集会に毎回顔を出せるわけではないし」

大和の思考が少し鈍くなった。

あまりにも唐突で、現実味の無い言葉だった。

「は？　ええ！　な、なに。お前九鬼家に就職したの？」

「まあそうなるな。九鬼家従者部隊序列６６６位城下典二。以後お見知りおきを」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8363y/

真剣で恋する五秒前！

2011年11月29日00時00分発行